2020 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	松井典夫
研究テーマ	事件・災害の未体験教員による「語り継ぎ」のジレンマと必要性・有効性の研究

＜助成研究の要旨＞

本研究は、「事件・災害の未体験教員による“語り継ぎ”のジレンマと必要性・有効性」について明らかにすることを目的にした研究である。そこでは、事件や災害を経験した学校をモデルとして、そこにいる事件・災害の体験・未体験教員をインフォーマントにインタビューを実施することが必要不可欠である。モデルとしては、現時点では東北地方（東日本大震災関連）、熊本県（熊本地震関連）等を予定していたが、2020 年 8 月の九州豪雨における“語り継ぎ”などもそのターゲットとなり、研究の対象とした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、2020 年 2 月 27 日に発出された全国の小中高への休校要請、あるいはこれまでに 3 回発出されている緊急事態宣言等から、教育現場は感染症対策、カリキュラム編成（休校中の授業時数確保や行事の削減等、含）に追われた。また、2020 年夏以降においても新型コロナウイルス感染拡大状況は緩和せず、全国への学校訪問については難を極める状況だった。そこで、教師へのインタビューについてはインタビューモデルを作成し、タブレット端末やパソコンを使用してオンラインで実施した。ここでは、大学生に研究協力依頼を行い、数日をかけて先方（対象の教師）と時間をかけてやりとりをした。インタビューは zoom 録画をして、書き起こす作業を行った（協力学生）。

インタビューは延べ 20 名の教員、教育行政関係者に実施し、延べ 1200 分に及んだ。また本研究では、事件、災害の体験教員と未体験教員の比較のため、インタビュー以外にも質問し調査を実施した。質問紙調査は、「職業的自尊心尺度の下位尺度「職務的自尊心」13 項目」や「天職観尺度 「天職観」9 項目」、「Locus of Control（LOC）尺度の下位尺度「外的統制感」9 項目」等、11 観点 89 項目で実施した。これも、新型コロナウイルス感染拡大状況における教員の日常的な業務の多忙において、支障のないように留意して実施した。

現在得られている結果としては、災害（熊本地震、令和 2 年 7 月豪雨災害）において、災害体験と未体験教員の比較については「脱人格化」「情緒的消耗感」に有意な差を見いだし，いずれも経験あり群の方が得点は高かった。特に「情緒的消耗感」における経験あり群の結果は，先行研究の項目平均値と比して高得点であった。それ故、災害を経験している教員においては，バーンアウトを未然に防ぐための対策を講じる必要があることが示唆された。また、インタビューでは、これは一例だが 1 人の未体験教員に焦点を当てたとき、「語り継ぎ」の対象は、教師へ、ではなく子どもたちであると明言した。語り継ぎの内容は「地震が怖いものであるということ。そこから子どもたちが目をそむけないようにすること。また、震災から感謝、地域の協力、家族のことを考えること。そして、怖いからこそできることとして、備えや他地域での災害に対してできることを考えよう」ということであった。興味深いのは、これは他のインフォーマントにも共通した懸念材料だったが、「語り継ぎの障害となりうるもの」として「周囲の批判的な目や言動にしんどい思いをした」ということだった。これは暗に「体験していないのに語っている、目立っている」という批判の眼差しを示すものである。しかし、この研究から、これから先、未体験教員が震災や事件の教訓を語り継いでいく必要性と、子どもたちへの有効な働きかけが明らかになってきている。そして、そのことはこれからの子どもたちの命に結びついていく教師の意味ある行為であることを、広く周知したい。

今後において、新型コロナウイルス感染拡大状況によって開催を見送ったシンポジウムについて、令和4年1月に神戸市で開催を予定し、準備を進めているところである。シンポジウムの開催によって、あるいは学会や論文発表によって、研究成果を広く発信していく所存である。